

辻清明の宇宙について

森孝一

陶芸家・辻清明が歿して十年になるが、生前の辻は、どんなに相手が偉くても物怖じせず、媚びることもなかった。権威や名誉におもねることなく、自分の生き方を全うした人である。『焔に生きる 辻清明自伝』（日本経済新聞社、一九九六年）には、「大人になつて『悪いものは悪い』と、はっきり言いたくなつてきた。日本人が創造してきた美しいものが忘れられ、お手軽なものが幅を利かしていることを、経験の積み重なりから実感し、黙っていられなくなつてきたからである。この自伝にはそんな思いも書いていきたいと考えている」とあるが、この文章からは、当時の辻の率直な想いが伝わってくる。「フランスは絵画、イタリアは彫刻、日本は陶芸だ」というのが口癖だったが、そんな日本の陶芸を背負つて生きているという自負が、辻にはあったのかも知れない。

二〇〇六年、七十九歳の時に東京都より「名誉都民」に選ばれるが、生前は全くと言っていいほど賞とは無縁であった。そんな中、唯一の賞が一九六四年の第九回（一九六三年度）日本陶磁協会賞、一九八三年の第二十七回（一九八二年度）日本陶磁協会賞金賞の受賞であった。世間では人間国宝に匹敵する実力の持ち主と評価されながらも、東京都下の多摩で信楽焼を制作する辻が重要無形文化財保持者に認定されることはなかった。辻は、日本工芸会や日展といった団体に属することもなく、生涯、無所属を貫き通した。賞に執着する多くの陶芸家を周囲に見ながら、賞よりも自由な生き方を選んだのであろう。それは、辻の生い立ちと深い関わりがあるように思われる。

辻の父・清吉は和歌山県出身の実業家で、最盛期には社員百人を抱えており、その一方で、学者、芸術家を支援し、参禅を行い、書画骨董を蒐集するという趣味人でも

あった。辻の物怖じしない性格は、幼くして父親と有名な蒐集家の家を訪ね歩き、常に大人の中に身を置いていたことと無関係ではあるまい。十代で陶芸家を志すようになってからも、足の届く範囲で学者や陶芸家の工房を訪ね歩き、富本憲吉氏、板谷波山氏の許へ通い教えを受けている辻であるが、そうした彼の行動も、その延長線にあるといつてもいいだろう。辻は生まれながらにして美しいものに囲まれ、一流の文化人と交流していたのである。

九歳の誕生日祝いに野々村仁清の《色絵雌鳥香炉》と対をなす《色絵雄鳥香炉》を、父親にねだつて買ってもらったが、辻にとつては、陶芸より骨董のほうが先だったのである。子どもの時から、いいものと悪いものに関する独自の価値観を身に付けていたというだけに、この体験が辻の感性を築いていたといつてもいいだろう。「子どもの頃から目にした夥しい古器や美術品の数々が作り手となつてからの私にどれだけ多くのインスピレーションを与えてくれたか計り知れないものがある」と語っているように、古器や美術品が辻の作品に与えた影響は大きい。

辻は、十歳の時に「古瀬戸四耳壺」に触発されてやきものに興味を持つようになる。父親に手轆轤を買ってもらい、十四歳で倒焰式石炭窯を自宅に供えて、姉の輝子とともに「辻陶器研究所」の看板をかかげ、白磁、天目、染付、色絵を制作する。しかし、辻が焼締陶に興味を持ったのは三十二歳の時、陶磁学者の小山富士夫から「六古窯」の話聞いてからのことである。

辻が本格的に信楽作品を発表するのは、昭和三十七（一九六二）年の日本橋三越での個展からで、その信楽土による自然釉の花器、壺、酒器、茶器をいち早く評価したのが、大徳寺の立花大亀老師であった。そして、昭和三十九（一九六四）年頃、山口諭助の『美の日本的完成』（宝雲舎、一九四四年）によって「明る寂び」の概念に目覚め、それを体現する信楽を自分の道と定めている。辻は、寂びを分けると信楽は「明る寂び」で、備前は「冷え枯れの寂び」だという。そんな辻の作る信楽は至つて自由で、作りたい形を信楽の土で作るといふのが、辻信楽の魅力でもある。それは、辻の作る唐津でも同じことが言える。そして、昭和四十五（一九七〇）年、辻の代表作ともいふべき《信楽大合子天心》「表紙」が完成する。

この作品について、

「『天心』とは文字どおり、天の心である。私が信楽の土に魅了されてより、もうか

れこれ半世紀がたとうとしている。

この荒ぶる山土は強靱な焼きものとなり、あたかも地球の奥深い内部に吹きあげるマグマの強烈な炎に溶融凝固する火成岩のようではないか！と思わせた。そしてまた、人類の原風景の中に想いを馳せたとき、気の遠くなるような『時』の累積に生成された土の塊が私の手から発信し、『天心』のかたまりとなった。内なるものをめぐり取っていく作業の中でも、私はひとつの自分の地底宇宙と、同化していくように思えた。それはとてつもなく激しい窯炎を呼び、火口に吸いこまれた空の風が厳然と、黙した土塊と戦いぬいたかたちとなった。私は、きつと私自身の地球を、心の天におきかえようとしていたに違いない」(現代日本の陶彫作家展「図録所収」の《信楽大合子 天心》の解説より、彫刻の森美術館、一九九六年)。

と語っている。この《信楽大合子》については、こんなエピソードも残っている。

『走泥社』が東京へ進出してきたんだ。私も見に行きましたよ。それからなんかの時に八木さんと知り合いになって、京都へ行った時に会ったり、飲むようになって、『信楽大合子』を京都へ持って行った時、「ただの土の塊りじゃないか」ってみんなにぼろくそにいわれたんだ。その中で八木さんだけが、「すごいなあ、これは地球の心だ



辻清明《越前大合子 大亀》1969年 愛知県陶磁美術館蔵
撮影：藤森武



辻清明《信楽耳付水指》1970年 東京国立近代美術館蔵
撮影：藤森武

ぞ。地球の中身を作ったんだから、マグマが焼いたんじゃないの」て冗談をいって、とても気に入ってくれたんです。それで、八木さんも信楽をやりたくなくなって、壱番館画廊で『信楽展』を開いたんです。口では『私は普段、電気窯でやってるから、信楽の窯元で焼いて貰ったんだ』と聞いていましたが、火廻りの一番いいところなんかちゃんと知っていた。それは一回しかやらなかったけど、でもどうしてもやりたかったんでしょね。私も壱番館画廊へ見に行きましたが、やっぱり素晴らしかった。そういうことで、八木さんとはお互いに行き来していました」(「日本陶磁協会の今・昔」陶説「五〇号、一九九九年」)

八木が信楽に挑戦し壱番館画廊で作品を発表したのは昭和四十一年(一九六六年)、辻が《信楽大合子 天心》を制作したのは昭和四十五年のことだが、昭和三十八(一九六三年)にはすでに《伊賀合子》を制作しており、四十年前後に辻が《信楽大合子》の試作品を制作していた可能性は、周囲の証言からも十分あり得ることである。ならば、このエピソードは大変興味深い話である。

辻は自伝の中で、「現在、特に熱中している信楽は、『明る寂び』という言葉で形容している。夜明けの空のような美しさという意味である。武骨だが、明るく、率直で、それでいて滋味あふれ、一本筋の通った世界、私はどうもそういうものが好きなのだ。今から振り返れば、それが私の人生の指針であり、生き方だったように思われてくる」とも語っている。

こうした辻の思想形成を考える上でもっとも重要なのが、昭和十八(一九四三年)、十六歳の時の岩手での疎開生活である。辻は父が持つ岩手県下閉伊郡田野畑村鉄山で、陶磁器の原料(珪石、長石)の採取を終戦まで行う。木を切り家を建て、畑を耕して炭を焼くといった三年間の田舎暮らしを通して、辻は縄文の感覚を身に付けたのである。辻は自伝の中で、「岩手で過ごした時間は、日本人の生活の原点を覚えてくれたように思う。樹木や草花、野性の魚や虫と対話しつつ生活を送ったからである。縄文土器をはじめ、日本のやきものもそうした生活から創造されたものである」と語っているが、そうした縄文の感覚を通して、物質を構成している五つの要素「地」「水」「火」「風」「空」と、人間の合作によって生み出される日本のやきもの本質、すなわち辻清明の宇宙に至ったのではないかと思うのである。(日本陶磁協会常任理事)